

事業名	奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良2018-2019」 青少年と創る演劇「ならのはこぶね」				
主催	奈良市アートプロジェクト実行委員会・奈良市				
文化振興計画 項目	①市民の文化に対する意識の高揚に関すること。 ⑤文化を担う人材の育成に関すること。 ⑥青少年の文化活動の支援に関すること。				
目的	奈良市アートプロジェクトは、現代社会がもつ様々な課題や事柄、未来に対して掘り下げ、考える機会を得るため実施している。そのなかで本事業は、中高生たちが自らが抱える問題・課題を解決する力を「演劇の創作」という過程のなかで身に付けることを目的とする。				
重点対象	出演者：中高生 観覧者：市内在住者				
目標値	アンケート結果	実績値	H27	H28	H29
	出演者・参加者アンケート 「自身の課題に対する変化」 あった以上：80%		—	—	—
			該当アンケート項目なし		
事業区分	奈良市主催事業	事業予算	収入	支出	
			3,800千円	3,800千円	
概要 (実施方法、協力者や協働相手など) 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」は「東アジア文化都市2016奈良市」の後継事業として、現代社会がもつ様々な課題や事柄、未来に対して掘り下げる考える機会とし、文化（アート）という窓を通じて、新たな価値の創造につなげることを目的に、美術部門と演劇部門を実施している。 本事業は「東アジア文化都市2016奈良市」で「高校生と創る演劇」として実施した翌年度以降も、演劇部門プログラムとして継続実施している。 作・演出は劇団田上パル主宰の田上豊。ワークショップデザインを研究し、現在教育現場を中心に、創造型、体験型のワークショップを全国各地で実施している。 オーディションで選ばれた中高生21人が出演する。演技経験の有無や年代や性別の垣根を越え、ひとつの作品を完成させる。 脚本・演出は毎回出演者に合わせてリメイクする。次年度からは新作を予定しているため、本作の公演は今回が最後となる予定。 今年度から、中高生のクリエイションスタッフ（裏方ボランティア）の募集と協働を進めている					
事業スケジュール（準備を含む）					
時期	内容				
8月	平田オリザの演劇ワークショップ（全年齢対象）				
9月	出演者オーディション（田上豊）				
9月	市長定例会見（奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」として）				
10月	観覧募集開始（チラシ配布、ウェブ、SNS）				
11月	演劇基礎練習（講師：地元演劇関係者）				
12月	本稽古＆リハーサル				
事業費内訳（主な経費）					
内訳	金額	内訳	金額		
演劇制作委託	3,800千円				

現状

本事業では、プロの演劇関係者とともに制作を体験することで、コミュニケーション能力を高めるとともに、中高生が創造する喜びを体感し、自らの成長につなげることを狙いとしている。そのため今年度から、稽古開始と公演後に出演者それぞれが自己チェックシートへの記入を行っている。稽古開始時に「克服したい自分の課題」を設定してもらい、公演後に自分に変化があったかを振り返ってもらっている。

次代を担う若者が「演劇」をツールに、創造性を育み、自らが抱える問題・課題を克服する力を身に付けることは、「現代社会がもつ様々な課題や事柄、未来に対して掘り下げる考える機会」という奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」の趣旨に合致するものである。

また奈良市文化振興計画における「⑤文化を担う人材の育成に関すること」や「⑥青少年の文化活動の支援に関すること」に繋がるものでもある。

今年度については、高校生13人、中学生8名の21人が出演。うち演劇経験がある人は、12人(裏方経験含む)。

稽古期間は15日。今年度より本稽古に先立ち、演劇の基礎を学ぶ基礎練習を取り入れ、地元の演劇関係者が指導者になることで、地域で文化活動を行っている人と出演者が交流を深める場面を設けている。

昨年度のアンケートによれば、観覧者の66%が演劇に「よく行く」「たまに行く」。来場のきっかけは、65%が「家族・友人から」。劇の感想としては、「大変良かった」「良かった」という高評価が87%であった。

「ならのはこぶね」という演目としては今回が最終公演の予定。次回からは新作上演を検討している。

課題

本事業では、中高生がひとつの公演を創り上げ、その経験が自らの成長につなげることに大きな意義があると考えている。しかし、出演者の成長を客観的に測ることは難しいため、「自己チェックシート」という形で出演者自身に振り返ってもらう方法を行っている。

本事業を続けることで、学校教育のみでは育むことができない「創造性」を身に付け、いわゆる「クリエイティブな人材の育成」へと繋げていきたいが、効果測定が難しく、事業の成果をどのように説明していくかが課題である。

また、奈良市域における劇団等の演劇関係者等との連携強化も必要であると考えている。

本事業の参加者が演劇の面白さを感じ、参加後も引き続き演劇活動が続けたいと希望した際に、活動の場を紹介・提供できるようにしたい。そのために、今年度から本稽古に先立ち行う基礎練習の講師を地元演劇関係者にお願いしている。連携を深めることで、奈良での演劇文化の振興にもつながればと考えている。

本事業に限らず、10代・20代を対象とした事業は、参加者を確保することが難しく、実施のハードルが高い。そのなかで、本事業や「東アジア文化創造NARAクラス」(大学生・高校生を対象とした国際文化交流事業)などを「東アジア文化都市」の後継事業として、若者を対象とした事業を市主催で継続実施していきたい。

平成30年度 事業視察説明シート

事業名	入江泰吉「古都奈良の文化財～総集編～」展								
主催	入江泰吉記念奈良市写真美術館								
文化振興計画項目	②芸術鑑賞等広く市民が文化に接する機会の拡充に関すること。								
目的	世界遺産「古都奈良の文化財」登録20周年を記念して開催。 奈良大和路の風物を長年撮影してきた入江作品で世界に誇る奈良の文化財を紹介する写真展。								
重点対象	特に小中学生や若者(高・大等)に鑑賞していただきたい写真展。教育機関と連携して課外授業などを取り入れ奈良の文化・歴史を伝えていく。								
目標値	来場者数	実績値 (入江作品展)	H27	H28	H29				
	観覧者数 3,000人 (39日間/1日77人)		-6,080人 (64日間/1日95人) 入江泰吉の全仕事	4,245人 (63日間/1日67人) 入江泰吉「春日大社展」	3,350人 (31日間/1日105人) 入江泰吉「菊池寛 賞受賞作品展」				
事業区分	管理付随事業	事業予算	収入	支出					
			589千円	589千円					
概要 (実施方法、協力者や協働相手など) 入江泰吉記念奈良市写真美術館では、奈良市出身の写真家・入江泰吉の写真展に加えて、現在国内外で活躍中の写真家の展示を行っている。入江関連展示とそれ以外の展示を同時開催することが多いが、本展については入江作品のみを扱ったものである。 本展の企画・実施については館学芸員が行っている。世界遺産登録20周年を記念して、奈良の文化財に関する作品が中心。3回シリーズの第3回になるが、これまで「東大寺・春日大社・春日山原始林」、「興福寺」をテーマにした作品展を実施した。 観覧料金は、一般500円、高校生・大学生200円(高校生のみ土曜日無料)、小中学生100円(土曜日無料)、市在住70歳以上の方無料、障がい者手帳をお持ちの方等無料、団体(20名以上)2割引。									
事業スケジュール(準備を含む)									
時期	内容								
平成29年8月	企画決定								
平成30年12月	展示作品選定								
平成30年12月	展示作業								
平成31年1月4日～ 2月17日	展示								
事業費内訳(主な経費)									
内訳	金額	内訳	金額						
通信運搬費	58千円	委託費支出	100千円						
消耗品費	50千円								
印刷製本費	311千円								
諸謝金支出	70千円								

現状

文化振興計画にある「芸術鑑賞等広く市民が文化に接する機会の拡充に関すること」を推進するにあたって、核となる事業である。

入江泰吉氏は奈良を代表する写真家であると同時に、奈良を代表する文化人でもある。志賀直哉や会津八一らとの交流もあり、近代以降の奈良の文化を見て取るにあたって重要な人物であり、テーマを設定し氏の写真を展示することは単なる写真展以上の意義がある。

本館においては、入江泰吉以外の写真家、現在活躍中の写真家による展示も行っている。今回の視察においては入江作品展のみの実施であるが、時期によっては「入江作品展」「他の写真家の作品展」が同時開催されている。

今日、活躍している写真家の展示を行うことで、入江泰吉ファンや奈良ファン以外の人の来館も増えており、入江泰吉作品の馴染みにない若い写真愛好家にも鑑賞の機会を提供できている。

また、昨今の写真家による作品を、入江作品とともに楽しむことができ、写真芸術の奥深さを感じてもらえていると考える。

ここ数年は来館者数が減少傾向にあったが、平成29年度(昨年度)は前年度比1.25倍となっており、上述の取組み(同時開催)を平成27年度に始めたことによる効果と考えられる。

奈良市には写真美術館のほか、杉岡華邨書道美術館と奈良市美術館があり、奈良市民に多様なジャンルの美術作品を鑑賞できる機会を提供しているが、来館者数の減少がみられる施設もあり、様々な施策を展開していく必要がある。

課題

入江泰吉記念奈良市写真美術館はその名のとおり、入江泰吉氏の功績の顕彰につながる展示を行っているが、その一方で写真専門の美術館として、昨今の写真界の動向を調査し、今話題の写真家、実力ある写真家、今後の活躍が期待される写真家などを取り上げていく必要がある。

写真美術館以外の書道美術館や市美術館においても、様々な展示企画を行っているが、市民のニーズも多様化しており、また奈良県下あるいは近隣都道府県で多種多様な美術展示が頻繁に行われており、市の事業としての目的を強く意識していく必要がある。

また、いずれの施設の事業においても、若い世代に来館してもらうことに苦労している。

各館に置いて地元小中学校と連携を試みてはいるが、学校の担当者の異動などにより継続されないケースもある。学校のカリキュラムのなかで美術鑑賞の機会を取り入れてもらうなど、市全体の取組として進める必要がある。

前回の会議においても指摘があったが、本館学芸員は入江泰吉旧居、奈良市美術館との兼務であることに加え、市美術館においては館長が設置されておらず、体制的な課題も抱えている。

本来、博物館・美術館においては展示だけが業務でなく、美術品の収集・保管・調査研究といった役割が課せられているが、財政難により十分な体制が取れていない。

平成30年度 事業視察説明シート

事業名	近現代かな書の流れ③ 現代かな書の成立				
主催	奈良市杉岡華邨書道美術館				
文化振興計画項目	②芸術鑑賞等広く市民が文化に接する機会の拡充に関すること。				
目的	奈良市民及び観光客、書芸術愛好家に杉岡華邨作品を中心とした近現代の書を鑑賞して頂くことにより、市民文化並びに書文化振興に寄与することを目的とする。近現代のかな書の歴史を追うシリーズ展の第3期。				
重点対象	市民文化の振興のため、市内在住の社会人・高齢者を重点対象とする一方で、書道文化振興のため広く市外在住者、観光客も重点対象としている。少子高齢化による書道人口減少が観覧者数減少に影響している。				
目標値	来場者数	実績値 (同規模展示)	H27	H28	H29
	観覧者数 5,000人 (会期71日/70人)		5013人 (80日/1日62人)大字かなの先覚者	5619人 (103日/1日54人)日本の漢字書家	3903人 (78日/1日50人) 上條信山の門流
事業区分	管理付随事業	事業予算	収入	支出	
			978千円	978千円	
概要 (実施方法、協力者や協働相手など) 奈良市杉岡華邨書道美術館において、明治から平成にかけてのかな書の展開を検証するシリーズ展「近現代かな書の流れ」を企画し開催してきた。平成26年に第Ⅰ期「上代様からの再出発」、同27年の第2期「大字かなの先覚者」に続く第Ⅲ期。 大字かな運動の時代を経て、さまざまな表現を模索し現代かな芸術を育み築き上げた作家を紹介する。 杉岡華邨氏の作品をはじめ、11人の書家による作品展示。 関連企画として、書道文化講座「古筆と先達の書に学ぶ」(講師:清水透谷氏)を行った。 観覧料金は300円、団体(20名以上)240円、障がい者手帳をお持ちの方等・市内70歳以上無料。					
事業スケジュール(準備を含む)					
時期	内容				
4～5月頃	企画決定				
6～8月頃	展示作品選定				
10月11日	展示作業				
10月13日～1月14日	展示				
事業費内訳(主な経費)					
内訳	金額	内訳	金額		
通信運搬費	100千円				
消耗品費	54千円				
印刷製本費	204千円				
委託費支出	620千円				

現状

奈良市杉岡華邨書道美術館は、当時文化功労者で、2000年秋に文化勲章を受章された杉岡華邨氏より、奈良市が作品の寄贈を受けたのを機に、氏の功績を称え、貴重な作品を永く後世に伝えるとともに、書道の発展に寄与するため、2000年8月4日に開館した書道専門の美術館。杉岡華邨氏は「かな書」の第一人者として知られ、本展においても出品書家の一人である。

書道の専門美術館は全国に12館しかなく、そのなかで「かな書」を中心とした作品群を所蔵している本館は、貴重な施設であるといえる。

本館では、企画展と館蔵品展を合わせて年4回開催しており、本展は企画展に位置付けられる。本展は「かな」をテーマにしているが、企画展では「漢字」などをテーマにするなど、「かな字」のみに捉われず、さまざまな書作品の展示を行っている。

奈良市には書道美術館のほか、入江泰吉記念奈良市写真美術館と奈良市美術館があり、奈良市民に多様なジャンルの美術作品を鑑賞できる機会を提供しているが、来館者数の減少がみられる施設もあり、様々な施策を展開していく必要がある。

課題

来館者の減少が見て取れる。背景のひとつに、書道人口の減少があると考えられる。その逆風のなかで、書道専門美術館の本質を損ねることなく、書道文化の裾野を広げられるよう新たな取組みをすすめていくべきと考える。

所蔵品の展示を中心とした魅力ある展覧会の企画・実施はもちろんのこと、教育機関や他の文化芸術団体などと連携しながら書道文化の裾野を広げていくことも課題である。

また、書道美術館以外の美術館施設の事業においても、若い世代に来館してもらうことに苦労している。各館に置いて地元小中学校と連携を試みてはいるが、学校の担当者の異動などにより継続されないケースもある。学校のカリキュラムのなかで美術鑑賞の機会を取り入れてもらうなど、市全体の取組として進める必要がある。

前回の会議においても指摘があったが、書道美術館には館長と学芸員がいるが、奈良市美術館においては館長が設置されておらず、また学芸員も写真美術館と兼務であり、体制的な課題も抱えている。

本来、博物館・美術館においては展示だけが業務でなく、美術品の収集・保管・調査研究といった役割が課せられているが、財政難により十分な体制が取れていない。

平成30年度 事業視察説明シート

事業名	わらべうた教室				
主催	奈良市音声館				
文化振興計画項目	④伝統文化の保存、普及及び継承に関すること。				
目的	奈良に伝わる“わらべうた”を継承し、ならまちの文化振興に役立てるとともに、わらべうたを通して奈良の歴史や文化への関心を育み、ふるさと奈良への愛情と誇りを育む。				
重点対象	未就学児、小学生				
目標値	参加者数	実績値	H27	H28	H29
	300人 子ども対象:120人 いきいきクラス(50歳以上):180人		425人	458人	330人
事業区分	自主事業	事業予算	収入	支出	
			2,988千円	2,988千円	
概要 (実施方法、協力者や協働相手など) わらべうた本来の姿を大切にしながら、子どもたちに馴染みやすい手法を用いてわらべうたへの興味・関心を引き出し、同時にわらべうたを通して子どもたちの人間関係づくりを援助し、幅広い層での世代間交流を経験できる場を提供する。 子ども対象の教室では、年齢に合わせて、わらべうたのみならず様々な遊びを取り入れている。また、年中行事や地域行事があるときは、行事に関するわらべうたや遊びを行っている。 1・2歳児クラス(親子)／木:25組程度 3歳児クラス(子どものみ)／水:20人程度 4・5歳児クラス(子どものみ)／木:20人程度 小学生クラス(1～6年生)／水:40名程度 いきいきクラス(50歳以上)2クラス／第4金:各90名程度 子ども対象クラスは年間27回開催。参加料は年間18,900円～24,300円(1回700円～900円)					
事業スケジュール(準備を含む)					
時期	内容				
前年度	参加者募集(平成30年3月まで)				
平成30年4月	教室開始				
平成31年3月	教室終了				
事業費内訳(主な経費)					
内訳	金額	内訳	金額		
通信運搬費	92千円	委託費支出	50千円		
消耗品費	426千円	賃借料	156千円		
印刷製本費	10千円	保険料	28千円		
諸謝金支出(人件費)	1,720千円	租税公課	119千円		

現状

本教室では子ども(1歳児～小学生)を対象としたものと、大人(50歳以上)を対象とした「いきいきクラス」を実施している。今回は、子ども対象の教室の視察を行う。

事業趣旨は奈良のわらべうたを遊びの中で親しんでもらい、歌い継いでいくこと。また、歌や遊びを通じて奈良の歴史や文化に触れてもらうというものである。園や学校、年齢や学年の違う友達を作り、一緒に遊ぶことで、協調性やリーダーシップを養い、お互いを思いやる心を育むことにもつながっている。

奈良は多くの伝統文化を有する場所であるが、様々な分野で後継者不足などに悩まされている。伝統文化を次代へと繋いでいくことは今を生きる私たちの責務であり、文化振興計画においても位置付けられている。

本市の取組としては、本事業や、同じく奈良市音声館で行っている「子ども邦楽教室」や「子どもお茶教室」、なら100年会館で実施の「こどもお能グループ」などがあげられる。

参加者の保護者からは、「奈良の伝統行事を詳しく知るきっかけとなった」、「人前で発表する機会があり、子どもに自信がついた」「親子でふれあう時間が増えた」などの意見が寄せられている。

また、保育園・幼稚園等からの依頼を受け、アウトリーチ活動なども実施している。

年間のカリキュラムは、過去の実績や評価、受講生からの意見を踏まえ、講師陣とともに考えている。また、講師同士の勉強会の実施や、講師自身がスキルアップに対して積極的であり、事業の質は確保できていると考える。

課題

少子化が進み、幼稚園等でも園児の確保のため、園内での習い事など、様々な取組みがなされている。そのためか、わらべうた教室に通う子どもも減少傾向にある。特に3歳から5歳の年代にその傾向が強い。

子どもが参加しやすい時間帯に変更したり、ニーズに対応できるよう改善を行っているが、参加者の増員にはつながっていない。

また、講師の確保も課題のひとつである。わらべうたを指導できる人材育成を行い、館の運営に協力いただけるように取組みを行っていくことが求められる。

また、本事業は自主事業であり、原則、教室の受講料を運営費にあてて実施しているが、講師に対して十分な謝礼をお支払できておらず、各講師の善意に頼っている現状である。

本市では各文化施設で様々な子ども向けの教室事業を展開している。そのほとんどが自主事業として実施しており、採算及び参加者の確保は課題である。市として、広報面で各館事業をバックアップすることで、参加者増へとつなげていきたい。